

“A JOINT EXHIBITION OF PAINTING AND
CALLIGRAPHY” by GE XIN-MIN &
TOSHIHARU KAWACHI at CHUNG-CHENG
ART GALLERY in NEW YORK

TOSHIHARU KAWACHI

はじめに

本稿はニューヨークの郊外, Grand Central and Utopia Parkways に位置する, St. John's University Sun Yat Sen Center (セント・ジョンズ大学, 孫逸仙記念館) 内にある研究機関, Institute of Asian Studies (亜洲研究学院) の Chung-Cheng Art Gallery (東方芸術収蔵館) において, 10月3日(土)から18日(日)まで開催された, “A JOINT EXHIBITION OF PAINTING AND CALLIGRAPHY” についての報告文である。筆者は出品者の一人として, 同二人展の開催実施に向け, 9月28日(月)から10月6日(火)までの9日間, ニューヨークを訪問し芸術交流を行ってきた。よってその体験を中心に, 単なるレポートとしてではなく, 今後の課題をも含めて考え感じたことを記してみたい。

1. 展覧会開催に至る経緯

まず今回の展覧会が開催に至った経緯について述べておこう。

現在, ニューヨーク在住で, 1990年5月8日, 本学において「中国画特別講座」と題して講演および実演を行って下さった李山 (Li Shan) 画伯 (元南京美術家協会副主席・安徽省巢湖国画院名誉院長⁽¹⁾) から, 91年8月28日付の手紙で, 葛新民 (Ge Xin-min) 画伯 (元中国安徽省巢湖国画院

副院長・仏教大学研究員・文教大学言語文化研究所客員研究員)との二人展を、ニューヨークで開催してはどうかとのお誘いを受けた。そこで両名は、昨年⁽²⁾の中国展に引き続き、またとない絶好の機会であると判断し、それぞれの代表作品の写真、ならびに略歴を李山先生宛に送付して是非とも実現できるようお願い申し上げた。その結果、李山画伯のご紹介で、セントジョーンズ大学の亜洲研究学院副院長兼東方芸術収蔵館館長である何平南 (Abraham P. Ho) 先生より、92年3月13日付の手紙で同館での葛画伯との二人展開催に関する正式な招聘状を頂戴した。招聘状の文面は次の通りである。

Chung-Cheng Art Gallery

March 13, 1992

Toshiharu Kawachi
Faculty of Japanese Languages and Culture
Chofu Gakuen Women's Junior College
Kanagawa Province 215 Japan

Dear Mr. Kawachi,

It is our great pleasure to invite you and Mr. Ge Xin-Min to a joint exhibition at the Chung-Cheng Art Gallery, Institute of Asian Studies, St. John's University, from October 3rd. through October 18 th., 1992.

The contents of this exhibit will include a total of approximately forty pieces of works. It would be most ideal if you could provide around twenty pieces of your recent calligraphic works for participating in this exhibition.

A demonstration on opening day, can be arranged if this is your desire. In the past, we have found that a demonstration has always attracted a great number of art patrons. If you have any questions regarding

this exhibition, please feel free to contact us at (718)
990-6583.

We are looking forward to seeing you and enjoying
your exquisite calligraphy this coming fall. Best regards.

Sincerely,

Abranam P. Ho
Curator

この招聘状に従い、先ず日程を確定し、次に葛新民画伯と筆者がそれぞれ20点あまりの合計40点前後を展示発表することに決めた。ただし、初日にデモンストレーションを行う件については、葛画伯が中国画（仏教画）を創作し完成させるには、とても短時間では不可能であるという理由で、とり行わないことにした。以上の旨を、李山画伯経由で、何平南館長にお知らせし、遂に実現の運びとなった次第である。

2. 展覧会出品一覧

筆者は何平南館長からの招聘状に従い、近年の作品から23点余りを選出し出品した。展覧会において、筆者が出品した全作品リストは次の通りである。セント・ジョーンズ大学側が用意したパンフレットおよび実際に個々の作品の横に作品解説として表示された目録番号・英文タイトル・制作年月・サイズを上段に掲げ、参考までにそれぞれの作品の日本語での作品名・書体・表具形式・既発表展覧会等を下段に記す。なお*印は中国展にも出品した作品である。

* 1) **Seal Engraving Notes, 1984**

「蠹魚齋印存」篆刻冊頁（一函三帙）・筑波大学卒業制作展

* 2) **A Poem of Shi Ching (Book of Songs), 1984** 166×50 cm

「詩経・柏舟」篆書立軸・第12回雪心会選抜展(奈良県文化会館)

- * 3) **A Poem of T'ao Ch'ien (Eastern Chin Dynasty), 1985**
35×20 cm
「陶潛・歸去來辭」篆書冊頁・習作
- * 4) **A Poem of T'ao Ch'ien (Eastern Chin Dynasty), 1985**
228×48 cm
「陶潛・歸園田居其一」篆書立軸・第2回読売書法新鋭展「佳作賞」(東京都美術館)
- * 5) **A Poem of Huang Tao Chou (Ming Dynasty), 1986**
25×15 cm
「黃道周詩翰冊」楷書冊頁・筑波大学修了制作展
- * 6) **A Poem of Ch'u Tz'ŭ (Book of Songs), 1986** 228×48 cm
「楚辭・漁父」篆書立軸・筑波大学修了制作展
- * 7) **A Poem of Kan Chazan (Japanese poet), 1987** 228×48 cm
「菅茶山詩」篆書立軸・第4回読売書法展「入選」(東京都美術館)
- * 8) **A Sentence of Biographies of Former Han Dynasty, 1987**
228×48 cm
「漢書列伝」篆書立軸・習作(パンフレット掲載作)
- * 9) **A Poem of Mao Tun, 1988** 228×48 cm
「茅盾・沁園春」篆書立軸・日本雪心会書法展(中国浙江省博物館文瀾閣)
- *10) **Quest Invisiblity, 1989** 22×34 cm
「探蹟索隱」隸書立軸・習作
- *11) **A Poem of Rai San Yō (Japanese poet), 1989** 228×48 cm
「頼山陽詩」篆書立軸・第6回読売書法展「入選」(東京都美術館)
- *12) **Better Be The Head of A Dog Than The Tail of A Lion, 1990**
25×34 cm
「鷄口牛後」篆書立軸・習作

- *13) **Conquer The World In Anger, Contend For Victory In Many Years, 1990** 47×41 cm
「一怒定天下千秋争是非」篆書立軸・習作
- *14) **A Sentence of Biographies of Shih Chi, 1990** 225×53 cm
「史記・刺客列伝」篆書立軸・第7回読売書法展「入選」（東京都美術館）
- *15) **Climb A Step By Step, 1990** 55×42 cm
「步步登高」篆書立軸・習作
- *16) **Respect For A Friend, 1990** 33×69 cm
「尚友」行書橫披・習作
- 17) **A Poem of Wang Wei (T'ang Dynasty), 1991** 68×41 cm
「王維和太常韋主簿五郎詩（聞道甘泉能獻賦・懸知独有子雲才）」
行書立軸・習作
- 18) **A Poem of Wei Yeh (T'ang Dynasty), 1991** 81×17 cm
「魏野・書友人屋壁詩（洗硯魚吞墨・烹茶鶴避煙）」行書對幅・
習作
- 19) **A Poem of Ch'u Tz'ü (Book of Songs), 1991** 136×34 cm
「楚辭・遠遊一節」篆書立軸・同木会展（東京教育大学・筑波大
学書專攻同窓会展）
- 20) **Don't Have To Do Anything And Naturally Come of Itself, 1991** 70×38 cm
「澹無為而自得」篆書立軸・巢鴨学園書道展贊助出品
- 21) **A Poem of Shu Hsi (Sung Dynasty), 1991** 45×61 cm
「朱熹・觀善齋詩」行書橫披・習作
- 22) **A Poem of Pai Lê T'ien (T'ang Dynasty), 1991** 68×23 cm
「白居易詩（久別偶相逢・猶疑是夢中）」行書對幅・習作
- 23) **A Poem of Chang Wei (T'ang Dynasty), 1991** 62×82 cm

「張謂・送人使河源詩一節」篆書横披・習作

選出基準については、残念ながら物理的現実的な制約が最優先してしまっただ。というのも、表具形式をご覧いただければ良いのだが、今回の出品作品は自分で持ち運べるようにと、トランクケースに入る大きさ（長さ）の軸装作品（1・3・5の作品を除く）を先ず選出したためである。しかしこの制約のもと、以下の三点の角度から厳格な選出を行った。

第一は、作品完成度の高いもの。これは最低の基準、作家としては当然の基準であるが、しかしまだまだ錬度の低い未熟な出来栄えのものが含まれたことは否めない。第二は、制作年代の新しいもの。この判断基準は、何平南館長の要請に答えたかったからである。結果として、91年作が7点、90年作が5点と、ここ二三年の作品でほぼ一半を占めることができた。残る一半は、84年から89年まで各年ごとに2点ずつ(88年だけは1点)を選び出し、全体としてここ数年の作品傾向とその流れが演出できるよう心がけた。第三は、作品の書体・形式・サイズのバランスである。篆書15点、行書5点、隸書・楷書・篆刻各1点とやや篆書に比重が傾くものの、全書体にまたがるようにした（篆書作品が多いのは、筆者が目下のところ篆書というスタイルを一番愛好しているためである）。形式にも配慮し、立軸以外にも横披・冊頁・対幅などをまじえ、サイズも画一化しないように、できるだけ大小織り交ぜバラエティに富むようにした。

以上の三点に基づき選び出した23の作品は、自己の芸術表現と作品相互の展示効果を最大限に発揮できるよう純粋に考えた結果であるが、いったいどれだけの方にご理解いただけたのか、実際のところ分からなかった。

3. 新聞報道—『世界日報』

ニューヨークで発行される中国語の新聞『世界日報』(World Journal) 9月30日付紙上に、展覧会に関する記事が掲載された。以下に全文を引用する。(ただし、原文の旧字体は常用漢字に変えた。下線部が筆者に関する

る記述である)。

葛新民・河内君平推出書画聯展

葛氏擅長仏教風味画作 倣敦煌壁画尤為高妙

【本報紐約訊】定居日本的安徽省籍画家葛新民，和日本籍的曾由文部省派到中国大陆浙江美術学校學習書法篆刻的河内君平，将在十月四日至十八日，在聖若望大学举行聯展。

葛新民目前是日本頗受歡迎的仏教芸術画家，曾替好幾座日本寺廟，在各殿的牆壁上繪製日本人癡迷的「敦煌壁画」。出身安徽省藝術学校，曾任巢湖国画院副院長的葛新民，在一九八一年時，曾經四度不辭辛苦，遠至敦煌臨摩石窟中的壁画，此後他鮮少再画其他水墨画，而成為一名仏教藝術家。他把臨摩敦煌仏像的經驗，加上原有的水墨画技法，画出一幅幅「臨摩加上創作」的仏像，仏教故事和充滿仏教風味的仏教画作。一九八三年，他應邀訪日，日本人对仏教風味的画作十分癡迷，不但喜愛他的画，京都大雲院曾邀他為寺廟一片一百五十呎長的牆壁繪製了倣敦煌知名的「飛天」壁画以及若干仏教故事壁画。他也曾為兵庫縣甘露寺繪製了同一風格的「飛天図」。目前定居日本的葛新民說，敦煌壁画美不勝收，仏教的造型，表情，動作，用色都和中土截然不同。臨摩這些公元四世紀到十四世紀的作品，使他越画越入迷，越画也越对仏教芸術有了更深一層的体会及親近。由於年代不同，敦煌石窟壁画中的仏像造型及衣著也有變化，葛新民獨鍾唐代豐滿潤澤的造型，因此他的創作也較接近唐代風格。在日本，他的仏像画不但是市場上的商品，也常被仏教徒「請」回家參拜，而寺廟多半喜好仏教故事，也喜歡把各殿的牆上，梁柱及屋頂上繪製色彩斑斕的倣敦煌風格的壁画。「飛天」是其中最受歡迎的体裁，衣袂翩翩的衆仙女，在雲端飛舞昇天的悠然自得，讓日本人百看不厭。如今中共已經不再准許画家們進出敦煌，臨摩壁画了。葛新民說，他真慶幸当年能四次進入敦煌，前後臨摩了六個月壁画，這六個月增添了他芸術生命中無盡的靈感。

卒業於筑波大学，对中国古典文学，書法和美術都有研究的河内君平此次展出書法多幀，他如今在調布女子大学教書。河内自小学習漢文，也學習書法，多次在日本的書法比賽中獲獎，曾被日本文部省視

為漢文的「明日之星」，派至大陸學習書法篆刻。說的一口北京話的河內說，他喜歡唐詩，尤愛杜甫，因為他完全懂漢文，因此他的書法不只是「写字」而已，其中是注入了情感与内涵的。

手前味噌になるが下線部を訳出する（なお括弧内は筆者の加筆および訂正である）。

「【本紙ニューヨーク電】日本在住で中国安徽省出身の画家葛新民と、日本国籍でかつて文部省から中国大陸の浙江美術学校（院）へ書法篆刻学習のために派遣された河内君平が、来る十月四日（正しくは三日）から十八日までセント・ジョーンズ大学において二人展を挙げる。（中略）筑波大学を卒業し、中国古典文学、書法、美術ともに研究成果のある河内君平は、この展覧会に書法作品を多数出品する。彼は現在、調布（学園）女子（短期）大学において教鞭をとっている。河内は幼少から漢文を学び、また書法を学び、日本の書道展で何度も入賞している。かつて文部省から漢文（書法）の『明日の星』と見なされて、中国大陸に渡り書法篆刻を学んだ。北京語をあやつる河内が言うには、彼は唐詩を愛し、なかでも杜甫が好きであると。彼は漢文を完全に理解しているので、彼の書は単に『字を書いた』だけのものではなく、その中には感情が移入されている。」

訳注として補足すると、筆者は1981年9月から83年7月までの二年間、文部省派遣留学生として、中華人民共和国浙江省杭州市にある、浙江美術学院国画系書法篆刻班に在籍し、先頃物故された沙孟海教授⁽³⁾（1992. 10. 10 逝去、享年93歳）に書法実技および書に関する学問を、劉江教授⁽⁴⁾に篆刻実技および篆刻に関する学問を、王伯敏教授⁽⁵⁾に中国美術史を、そして章祖安教授⁽⁶⁾に中国古典文学を学んだ。この留学中に学び身に着けた人生観・学問観・芸術観が、今日の筆者の書家としての土台となっている。

4. 展覧会場で印象に残った交流

展覧会場は、天井が高く、周囲の壁面に加え、中央にパネル5枚を立てたことにより壁面もかなり広く、日本または中国において展覧会を開催しているような錯覚に陥るほど、雰囲気といい環境といいまったく違和感がなかった。また、ギャラリーには文房四宝(筆筒など)や清朝の官僚装束・装飾品などがガラスケース入りで常設展示されており、会場は自ずとアジア色に包まれていた。展示準備(搬入・陳列)がスムーズに運行し、わずか二時間余りの時間内に飾り付けが完了できたのも、このような雰囲気のおかげである。さらには、人手が足りないであろうと言って、台湾生まれの何平南館長自らがお手伝いくださり、そのうえ北京からの留学生も動員してくださった。本当にどうしてもアメリカにいる気がしなかった。

オープニングに先立ち、プレヴェウが10月3日の午後2時から行われ、たくさんの関係者が来館してくださった。この折、何平南館長・李山画伯等のご紹介で、ニューヨーク在住の多数の書画家の方々と面識をもった。彼らを通じて、アメリカ現代美術界の動向、在米中国人書画家たちのアメリカ社会に臨む姿勢、在米韓国人書家の日本の書に対する考え方等々の一端を垣間見れたことは、筆者の宿願であっただけに、誠に貴重な体験といえる。

とくに、「絵画ジャンルの中で、伝統古来の中国画をいかにしてアメリカ社会にアピールし人々を魅了していくか」という、ある在米中国画家の発言には強烈な印象を与えられた。文化大革命(1966~1976)・天安門事件(1989. 6. 4)といった政府の非人道的行為に対する不信と絶望から逃れるために、新天地をアメリカ大陸に求めて渡来した人々は無数にいると思われるが、筆者が知り合った中国人書画家たちの中にも、何とんでも自己の作品を売って食わねばならぬという切羽詰まった生活環境の中に身を置かざるを得ず、一旗揚げるまでは帰国できない状態にあるように感じら

れた方が少なくなかった。ハングリー精神という聞こえはいいが、そんな甘っちょろいものでは決してない、真のプロ魂を見せつけられた気がする。のこのことアメリカまで出かけた自分自身が、気恥ずかしく思えてならなかった。彼らの芸術活動は生活がかかっているだけに、綺麗事では済まされない。異文化間の衝突や闘争の中からこそ、真の異文化の融合が形成されて行く、これこそが芸術文化の真の国際交流の姿であると考えさせられた。

5. 反省点

渡米全般にわたる面と展覧作品についての反省材料を、自己批判の意味を込めて列挙してみる。

① ニューヨークは初めての訪問地であったが、中国語9割・英語1割という環境の中で過ごしたため、中国人を通じてアメリカ社会を見てきたように感じる。これはこれで面白い体験を積んだとは思いますが、もう少し日本人としての主張をアメリカ社会（在米中国人書画家を含む）に対してぶつけてみたかった。そのためには、当然の事ながら英語での表現能力を身に着けなければならないと痛感した。要するに語学力不足であった。

② 二週間もの会期中に、わずか初日・二日目と2回しか展覧会場に行けなかったことは、いくら公務期間中のこととは言え、実に勿体ない計画であった。定職を持ちながら作家活動をすると言うのは土台無理なことなのかもしれない。

③ 軸装という表具形式が、アメリカ社会には受容されにくい不似合いなものに筆者の目には映った。住環境を考えれば、せめてフレーム枠（額装）形式で出品すべきであったと感じる。

④ 出品作品は、自分なりにはベストに近いものを選出したはずであったが、全体としては今一つ物足りなかった。バランス良く選出するよりも、むしろ一つの傾向に固執して表現の方向性をより鮮明に打ち出したほ

うがインパクトが強かったかもしれない。

⑤ 英文でのキャプションをもっと徹底し、作品解説（詩文の意味）を付加すべきであった。そうすれば、まがりなりにも参観者ともっと会話できたに違いない。これは、日本での展覧会場でも同様である。少しでも多くのインフォメーションを伝達するよう心がけることは、書芸術の受け手（参観者）を養成する意味でも大切なことであろう。

6. 将来展望—結びに代えて

筆者は、書は芸術表現のいとなみの一つであると考えている。因って、筆者にとって字を書くという行為は、書作品を創作することであり、その最終目標は自己の書を確立することにある。しかし日本国内においては、書が芸術であると考え、真剣に書作品を創作する本当の「書家」が非常に少ないように思えてならない。絵画・彫刻・建築・音楽といった他の芸術ジャンルに比べると、技法の鍛練に時間を要し、かつ「書は人なり」と言うように精神性を過度に強調しすぎるきらいがあり、若輩には自己の書を確立することは不可能であるという考えかたが支配しているように思われる。書が人格形成と不可分の関係にあると見なす哲学的な視点には異を唱えないが、創造性や芸術性をあまりにも軽視しすぎてはいまいか。このような状態では現代芸術の一ジャンル足り得るはずがない。どうすればこのような状態を改善できるかという問題には、筆者は今のところ、解答を持ちあわせない。ただ危険感を覚えるのは、日本文化全体の底上げを図らなければ、書という芸術文化の生命線は断たれてしまうということである。伝統を保存し死守するだけでは、先細りをするのみである。伝統を踏まえ、そこから創造性豊かな新たな書芸術が花開くよう模索していかなければなるまい。これこそが、真の書家に課せられた使命であると信じる。筆者は、ニューヨークからこの使命感を強く抱いて帰国したことが最高の収穫であったと思う。

書という芸術が、アメリカ社会に融け込むにはそれ相当の年月がかかろう。ひょっとすると不可能かも知れぬ。しかし、上述の在米中国画家の発言のように、それに挑戦していこうという気概がなくては、将来に書を芸術の確固たる一ジャンルとして定着させることはできない。文字（漢字）に対する理解が皆無の人々に、その文字感覚なり文学性を投げかけることは至難である。それだけに、漢字文化圏と非漢字文化圏との芸術文化の交流は、時間と草の根的交友の積み重ねがなくては生まれてこない。今回のような展覧会が常時開催されることを、筆者自身にもそして他の書家にも切に願ってやまない。

最後に、招聘状・パンフレット作成・展示運営と展覧会実現に向けて多大なるお骨折りを賜った何平南館長と李山画伯に改めて感謝の意を表したい。とくに李山画伯には、準備段階からニューヨーク滞在期間中まで、ありとあらゆる面でお世話になった。生涯の師友として敬愛すべき人物である。筆者は在米中、9日間とも李山画伯のお宅にホームステイさせて頂き奥様（中国画家）や娘さん（洋画家）にも公私ともに一家総出で面倒を見ていただいた。筆者が渡米前以に抱いていた心配事は、万端あい整い、まったくの杞憂にすぎなかったことを特筆しておきたい。これら全てが李山画伯のお陰である。亜洲研究学院に作品を寄贈してきたが、これはせめてもの交流の証し、ほんの感謝の意にすぎない⁽⁷⁾。

注

- (1) 李山 (Li Shan) 画伯は、山東省青島海浜、1926年のお生まれ。1958年に浙江美術学院国画系を卒業され、『新疆画報社』美術記者となり、1961年には作品「天山月初昇」が、北京の人民大会堂に陳列され注目を浴びる。1981年以後、アメリカに定住し、ネブラスカ大学など12の研究機関で講義され、テキサスの Wesleyan College の客員教授なども勤め、中国国内・アメリカ国内はもとより、香港・台湾・シンガポール・マレーシア等でも数多く個展を開催されておられる。その芸術略歴は『中国美術家人名辞典』（上海人民美術出版社、1981年12月）や『中国芸術家辞典』現代第三分冊（湖南人民出版社、1982年12月）

など中国を代表する辞典に収録されている。筆者は葛新民画伯の紹介で李山画伯との面識を得、1990年5月8日には、無理をお願いして「どのように中国画を鑑賞するか」というお話と、「中国画基本技術の紹介（山水・花鳥・人物）」という実演を本学において行っていただいた。

- (2) 中国展というのは、1991年9月7日（土）から13日（金）まで、中華人民共和国安徽省合肥市にある安徽省博物館で開催した《花摘幹夫・河内君平・葛新民一日中書画芸術展覧》を指す。詳細については、『調布日本文化』第二号掲載の拙文『廬州墨縁記——《花摘幹夫・河内君平・葛新民——日中書画芸術展覧》開催報告』をご参照願いたい。
- (3) 沙孟海教授の訃報に接し、筆者は哀悼の意をこめ、「沙孟海先生追悼文一師恩に報いんと欲するも未だ為す有らず」（有限会社「雪心」新書鑑編集部発行『新書鑑』209号、1992年12月25日）という拙文を草した。それには、先生から直接指導していただいた書に関する学問を詳細に列挙したので、ご参照願えれば幸いである。なお筆者には別に、先生の論文を翻訳した「両晋・南北朝・隋代の書法略論」（『新書鑑』100号、1983年11月25日）がある。
- (4) 劉江教授については、拙文「劉江先生の人となり——“中国書法教育会の重鎮”」（『新書鑑』206号、1992年9月25日）と、拙訳「“古人を尊重し、自己を尊重す”——第28回雪心会展特別講評」（同前）をご参照願いたい。
- (5) 王伯敏教授については、そのご著書『中国画的構図』（天津人民美術出版社、1981年6月初版）を、『中国画の基礎構図』（雄山閣出版社、1985年10月5日）として訳出發行させていただき、訳者後記に詳述したので、ご参照願えれば幸いである。
- (6) 章祖安教授については、拙文「章祖安先生の人となり」（『新書鑑』182号、1990年9月25日）と、拙訳「“材に因りて教えを施す”——雪心会展特別講評」（同前）をご参照願いたい。
- (7) この小文に先立ち、「ニューヨーク展回顧録」を『〈古代書法家軼事百則〉講読「第67回・蘇東坡高標自許」』の【余話】（『新書鑑』209号）に記したことをお断りしておく。